

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 2 日現在

機関番号：12102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24652056

研究課題名(和文) 20世紀ヨーロッパ文学におけるトラウマ表象についての総合的研究

研究課題名(英文) Synthetic Studies on the Representation of Trauma in the 20th Century European Literature

研究代表者

対馬 美千子 (TSUSHIMA, Michiko)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：90312785

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：20世紀ヨーロッパ文学においてトラウマがどのように表象されているかについて、サミュエル・ベケットの作品を軸に様々な視点(小説、演劇、思想)から考察を行った。また海外の研究者を招聘し、ベケットとトラウマ表象についての公開の研究会を開催した。これらの研究活動を通して日本を拠点とした世界的ネットワークを発展させることができた。さらにこの成果を英語の論文集、Samuel Beckett and Trauma として出版する準備を行った。

研究成果の概要(英文)：We analyzed how trauma is represented in the 20th Century European Literature, from various angles (novels, theatre, thought), focusing on the works of Samuel Beckett. We also invited researchers from other countries and held symposiums on Beckett and the representation of trauma. Through these research activities we could develop the international research network based in Japan. We made preparations for the publication of a collection of essays entitled Samuel Beckett and Trauma in order to publicize the result of this research.

研究分野：人文学

キーワード：トラウマ サミュエル・ベケット 20世紀ヨーロッパ文学

1. 研究開始当初の背景

本研究は挑戦的萌芽研究「現代ヨーロッパ文学・演劇・思想における身体的痛みの共有可能性の総合的研究」(H18～20年度)、挑戦的萌芽研究「現代ヨーロッパ文学における痛みと共同性の総合的研究」(H21～23年度)の延長線上にあり、これまでの研究を発展させるものである。これまでの研究において日本を拠点とした世界的な研究ネットワークが築かれ、その研究成果は日本を発信地とする英語の論集、*Samuel Beckett and Pain* という形で Rodopi 社から平成24年に刊行された。

本研究はこれまでの研究で構築した世界的ネットワークを継続し発展させること、痛みというテーマの延長線上で、トラウマ表象について考察することを主眼とした。トラウマと文学に関する研究は英語圏において近年、数多く出版されている。本研究に関連する研究としては、モダニズム、戦後の思想的動向、ホロコースト、アイルランドとの関連においてトラウマについて考察した研究がある。本研究では、これらの研究、そして主要なトラウマ理論を踏まえた上で、トラウマ表象を理解するために重要であるにもかかわらずトラウマ研究においてこれまで注目されることのなかったサミュエル・ベケットの作品を軸に、20世紀ヨーロッパ文学におけるトラウマ表象について検討しようとした。

2. 研究の目的

本研究は、20世紀ヨーロッパ文学におけるトラウマ表象について総合的視点から明らかにすることを目的とする。

(1)まず小説、演劇、思想のセクションごとに、トラウマ表象について、ベケット作品を軸に様々な角度から分析を行う。

小説セクション: モダニズム期のウルフ、ロレンス、ハックスリー、マンスフィールド、ルイスらのイギリス小説に戦争のトラウマがどのように表象されているかを検討し、ベケットとの関連を探る。

演劇セクション: ベケットの戯曲を中心に、トラウマがどのように表象されているかを、ベケットの伝記的事実とからめながら考察すると同時に、演劇的・美学的体験としてのトラウマの意味を探る。

思想セクション: トラウマ的体験という表象不可能な出来事の体験を表象するという本質的にパラドキシカルな試みにもとづく文学的言語とはどのような言語なのかについて、カルースらのトラウマ理論、現代思想、精神分析における言語論を参照し、ベケット作品の分析を通して考察する。

(2) さらに3セクションの総合的考察の上に立って、20世紀ヨーロッパ文学におけるトラウマ表象とはいかなるものであるか、さらにその考察にもとづき、大災害、暴力、戦争、テロリズムなどの破壊的経験を多く抱える現代において、トラウマ的体験をもつ<他者>の傷から発せられた声や言葉に耳を傾けることはいかに可能であるかを明らかにする。

本研究の学術的特色は、トラウマという従来、医学、精神分析の研究対象であったテーマを、文学に加え、演劇、思想を含む文化創造活動の総合的な視点から考察する点、大震災という未曾有の経験をした日本を含めて、様々なカタルストロフィ的現実に遭遇し、そこからの復興の可能性を模索する現代社会との関わりにおいて研究を進める点、トラ

ウマ表象について考察するにとどまらず、トラウマ的体験をもつ〈他者〉との関係において生じるダイナミズムの持つ倫理的、政治的意味を考察する点にある。本研究は現代社会において着目すべき現象であるトラウマの問題に文学、演劇、思想の視点から新たな視座をもたらすものである。

3. 研究の方法

研究体制は、田尻を中心とする小説セクション、堀を中心とする演劇セクション、対馬を中心とする思想セクションという3つの研究セクションで構成され、全体の統括者は対馬である。研究方法・計画の要旨は以下の通りである。

(1)平成24年度：以下の作業を進める。

研究資料や文献を収集し、その資料整理を行う。

セクションごとにトラウマ表象の問題について、ベケットの作品を軸に様々な角度から分析を行う。

の考察の成果を発表し、海外共同研究者との意見交換を行うための研究会を外部に開かれたかたちで開催し、外部の参加者との研究の交流の場として考察を深める契機とすると共に、本研究の参加者がベースとしての考察を共有する。

(2)平成25年度：前年度の研究会を中心とした研究活動の成果をもとに、それぞれのセクションにおける20世紀ヨーロッパ文学におけるトラウマ表象の問題についての問題域を確定する。さらに、文化創造活動である文学と、現代社会との関わりを考えながら、現代社会において、表象不可能であるトラウマ的体験の伝達、聴きとり、共有の可能性について、どのよ

うな新しいパースペクティブを与えうるかの考察を深めていく。同時に以下の作業を進める。

研究資料や文献を収集し、その資料をさらに充実させ、資料整理を行う。

前年度に引き続き、セクションごとに20世紀ヨーロッパ文学におけるトラウマ表象の問題について、ベケットの作品を軸に様々な角度から分析を行い、考察を深める。

国内外の学会で研究成果を発表する。

公開の研究会を開催し、それまでの研究成果を提示する。

(3)平成26年度：過去2年間の研究活動を通して得られた成果を全体としてまとめあげる。本研究が現代社会に対して提示できるトラウマ表象としての文学の問題についての考察をまとめていく。その延長線上で以下の作業を進める。

前年度に引き続き、セクションごとに20世紀ヨーロッパ文学におけるトラウマ表象の問題について、ベケットの作品を軸に様々な角度から分析を行い、考察を深める。

研究の成果を論文集の形でまとめ、研究叢書として英語圏の出版社から出版する準備を進める。

4. 研究成果

(1)小説、演劇、思想セクションごとに、20世紀ヨーロッパ文学におけるトラウマ表象の問題について、サミュエル・ベケットの作品を軸に様々な角度から分析を行った。またその分析結果を学会発表、論文、図書形で発表した。

小説セクション(田尻)：計画通り、戦間期の

モダニズム文学と、第二次世界大戦後のベケットの作品をトラウマとの関連で比較する研究を進めた。その具体的な成果は平成 26 年 6 月にロンドンのモダニズム研究協会で口頭発表した、ウルフ『ダロウェイ夫人』とベケットの『しあわせな日々』についての論文である。ここでは、歴史的、個人的トラウマが、大災厄にもかかわらずまだ自分は生存しているという感覚を通じて、日常の平凡な事物への普通以上の注意を生んでいることに着目し、日常生活研究とトラウマ研究の十字路で文学作品の読解がいかに可能かを考察した。

演劇セクション(堀):平成 24 年度は、ベケットの演劇のなかでしばしば言及される伝記的記述とトラウマとの関係についてベケット・ワーキング・グループで口頭発表を行ない、翌年度大学の紀要論文に発表した。平成 26 年度にはサイレント映画時代の映像技術との関係でもトラウマについてベケット・ワーキング・グループの場で意見交換をした。また、論文集に向けて、戦後、欧米のメディアを賑わした核の脅威という文化的トラウマとの関係においてベケットの演劇が果たした役割や観客の受け止め方について考察した論文を執筆した。

思想セクション(対馬):トラウマ的体験という表象不可能な出来事の体験を表象するという本質的にパラドクシカルな試みにもとづく文学的言語とはどのような言語なのかについて考える上で、ベケットの小説『ワット』を取り上げ、その分析を中心に進め、論文を執筆した。ここでは『ワット』というテキストがトラウマを表象する文学的言語の一つのあり方を示しており、「言葉の皮膚」あるいは「皮膚」としての言語として存在している可能性について考察した。その際、トラウマ体験の表象と「皮膚」の関係に関わる

重要な理論、主にアンジューの「皮膚 自我」に関する精神分析理論、カールスらのトラウマ理論、コナー、ベンティーンの皮膚理論を参照した。

(2)各セクションにおいて、トラウマ表象に関する研究資料や文献を収集し、その資料の整理を行った。

(3)海外の研究者を招聘し、ベケットとトラウマ表象についての公開の研究会を開催した。また海外の研究者に執筆を依頼し、同テーマの英語の論文集の出版準備を進めた。これらの活動を通して、前回の研究で築いた日本を拠点とした世界的な研究ネットワークを発展させた。

平成 24 年 12 月には、Julie Campbell 氏 (University of Southampton) を招き、青山学院大学で、ベケットとトラウマについての講演をしていただいた。また、本プロジェクトについての専門的知識の提供を受けた。平成 25 年 9 月には、Robert Eaglestone 氏 (University of London) を招聘し、東京大学で開催された研究会において、トラウマ理論の最前線に関する講演をしていただいた。彼からも専門的知識の提供を受けた。

(4)で説明している英語の論文集の出版準備を通して、執筆者であるイギリス、カナダ、アイルランドの 7 名の海外研究者の方々との意見・情報交換を継続的に行い、研究ネットワークを発展させた。論文集の執筆者として、本研究に参加して下さった研究者は以下の通りである。

Robert Eaglestone 氏 (University of London, Professor)

Julie Campbell 氏 (University of Southampton, Lecturer)

Ulrika Maude 氏 (University of Bristol, Senior Lecturer)

Nicholas Johnson 氏 (Trinity College)

Dublin, Assistant Professor)

David Houston Jones 氏 (University of Exeter, Associate Professor)

Jonathan Boulter 氏 (University of Western Ontario, Associate Professor)

Conor Carville 氏 (University of Reading, Associate Professor)

(4) 研究の成果を英語の論文集として出版するための準備を行った。3人で協力し、執筆者の選定、執筆者への依頼、出版社に送る出版企画書の作成、出版企画書の送付などを行った。

(5) 今後は、挑戦的萌芽研究「現代ヨーロッパにおけるトラウマと創造性についての総合的研究」(H27~29年度)において、本研究において発展させた日本を拠点として世界的な研究ネットワークを継続させながら、本研究のトラウマというテーマの延長線上で、トラウマと創造性について研究を進めていく予定である。また、英語の論文集を出版し、研究成果を海外に提示する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

堀真理子、The 'Freedom' of Sartre and Beckett: *The Flies* versus *Eleutheria*, *Samuel Beckett Today / Aujourd'hui*, 査読有、Vol.25、2013、59-73

堀真理子、Beckett's Struggle with His Traumatic Memories、『経済研究』、査読無、第6号、2013、1-20

対馬美千子、「アーレントと文学の力」、『論叢現代語・現代文化』、査読有、Vol.10、

2013、1-21

[学会発表](計3件)

堀真理子、Filmic Images of the Narrative of Beckett with Particular Emphasis on 'A Piece of Monologue'、International Federation of Theatre Research、2014年7月29日、University of Warwick, Coventry (United Kingdom)
田尻芳樹、Trauma and Ordinary Objects in Virginia Woolf and Samuel Beckett、BAMS(British Association for Modernist Studies) International Conference: Modernism Now!、2014年6月27日、Institute of English Studies, Senate House, London (United Kingdom)
堀真理子、Beckett's Struggle with His Traumatic Memories、Samuel Beckett Working Group、2012年9月7日、University of Southampton (United Kingdom)

[図書](計2件)

堀真理子、'Struggling With a Dead Language': Language of Others in *All That Fall* and the Japanese Avant-Garde Theatre in the 1960s、*The Edinburgh Companion to Samuel Beckett and the Arts*, Edinburgh University Press、2014、465-475

堀真理子、田尻芳樹、対馬美千子、『ベケットを見る八つの方法 批評のボーダレス』、水声社、2013、37-50、233-257

6. 研究組織

(1) 研究代表者

対馬 美千子 (TSUSHIMA, Michiko)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：90312785

(2)研究分担者

堀 真理子 (HORI, Mariko)

青山学院大学・経営学部・教授

研究者番号： 50190228

田尻 芳樹 (TAJIRI, Yoshiki)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号： 20251746